これからの猪猟〈3回〉

田宮　治

忍びない決断

どの猪を追って勝負すればよいかと立ち止まって思案していた。すると突然、山々を揺れ動かすようなマロ号の威嚇鳴きが、「そら、ジジ、猪が行くぞ！」という合図のように小峰の上で響き渡った。

はっとして見上げると、マロ号の鋭い攻め鳴きに追い落とされた猪が、バリバリと枯れ木をへし折りながら、まるで大岩が雪煙を上げて凄い勢いで転がり落ちるように下りて来た。

「よし来た」と銃を向けて狙ってはみたものの、そこは急斜面の杉林で五、六〇㍍も離れている。下りて来る猪影がちらちら見える程度で、とても撃ち獲れる距離ではない。

私は気合を入れて一発送り込んだ。当然、轟音は私の気持ちが乗り移ったかのように遠くの山々まで轟き渡り、三頭の犬たちに私のやる気を伝えるものだった。「さあ犬たちよ、来い！　猪はここだ。この猪をどこまでも追って必ず獲るぞ！」と景気づけに鳴らす突撃ラッパである。

この一発がマロ号に届かないはずがない。猪を仕留める銃声は犬たちを何よりも元気づける。マロ号はこの銃声をかき消すくらいの凄い勢いで鳴きながら飛び下りて来た。まるで赤い怪物が「こら待て！」と一気に猪を丸呑みする狂騒で雪を蹴散らし、猪を追い落とした。そして、あっという間に杉の木の急坂を駆け下り、谷を渡って向かいの小峰を越えた。

あまりの速さと凄さに、いつもの大声で怒鳴ることも忘れ、ただ呆然とマロ号の雄姿を見送るだけだった。

「しまった。これは追われ慣れた猛猪だ。交尾のため追っかけが始まり、猪が集まっていたので止め切れず、犬たちが二手に分かれて猪を追っているのだ。どうしたものか？」

GPSで確認すると、止め現場からマロ号が大鳴きで威嚇した小峰までヨシ号とシロ号はマロ号と一緒だったが、そこからマロ号と分かれて、反対に上の大峰に登って、大山を越えてその裏まで突っ走り、赤芝沢の大沢にある堰堤の上で動かなくなっている。

GPSに無線機は付いていないので鳴き声は聞こえないが、この様子ではがっちりと止めて俺を待っているに違いない。本来ならヨシ号たちのほうへ寄り付くのだが、どの犬に寄り付くか、まさに一刻を争う状況の中で私が決断したのはマロ号のほうだった。

既に突撃ラッパを高らかに撃ち鳴らして「マロよ、この猪をどこまでも追って絶対に撃ち獲るぞ！」と挑発した以上は、この一戦をマロ号とともに戦い抜いて、完勝する以外にない。

残念だが、単独猟では両方の犬たちが喜ぶ戦いはできない。ヨシ号とシロ号の頑張りを思えば何とも忍びないが、この状況下では仕方がない。「ヨシ、ごめんな。シロ、許してくれ」と心から詫びながら無情にも見捨てたのである。

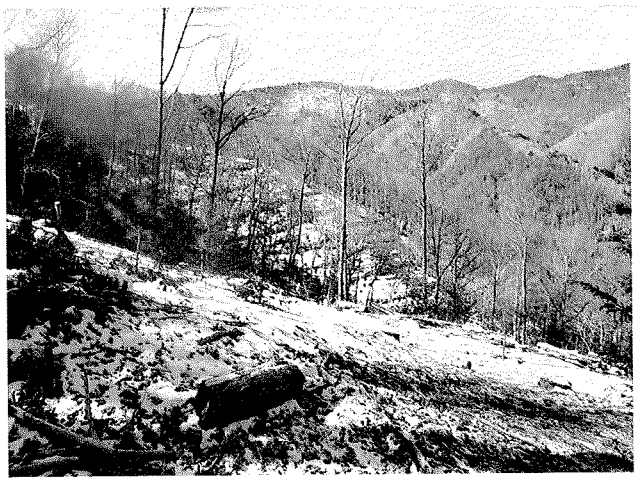
そうと決めたからには、ここから本物の単独猪猟をやり遂げるだけである。私の追い求める猪猟技術と名犬芸を全開にして、執念を持って勝ち取る覚悟である。

そこで、マロ号だけに傾注して現在地を確認してみると、雪中の小峰を三本越えて、今日予定して

いた峠の上の猟場にいるようだ。二キロも離れているが、幸いあまり動いていない。あの一発が効いたようだ。さすがはマロ号である。既に止めを刺している。

私がマロ号の後を付いて追って行けば、居を止めながらどこまでも追い続け、一頭でも必ず止め切る実力を持っているが、このままの状態では戻って来てしまう。何としても、私が後を追っていることをマロ号に一刻も早く知らせる必要がある。私はGPSをポケットに入れ、すぐ下の道に止めている車に急いで戻った。

本来なら主人が車に戻ったり車を移動する行為は厳禁である。私が出猟する時は愛犬たちを必ず車から放すことにしており、猟が終われば犬たちは放犬場所の車に必ず戻って来るように仕上げている。そのため、愛犬たちは常に車を拠り所にして、安心して猪を追っかけたり帰って来たりしているのである。



右下の沢が小屋の沢で、ヨシ号とシロ号は猪を追い上げ、私とマロ号を目指してこの残雪の所まで上って来ていた。この左を越えた少し下の尾根で私とマロ号が猪と戦っていた

わが犬舎の犬たちの戻りが良いのも、猪を私や車に目がけて追い立てるのも、これらすべてが日頃の訓練によるものである。犬たちからすれば車も主人（私）と同じ大事な物と考えている。しかし、この現状では峠まで車で追うしかマロ号に近づく方法はない。

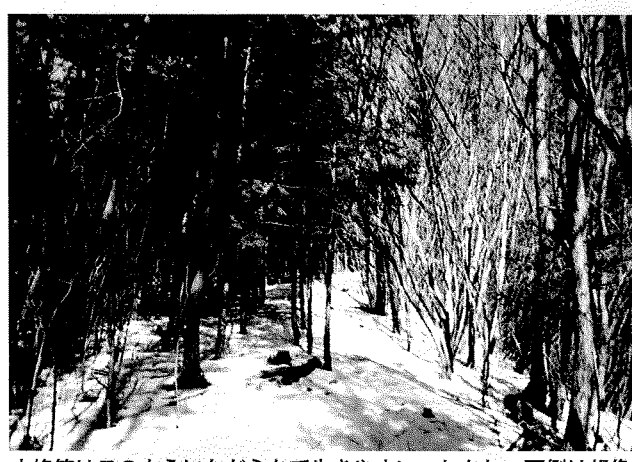
「マロ、待ってろよ。すぐに行くからな！」と雪道のつづら坂を急いで上ったが、それでも十五分くらいかかって峠の広場に到着した。真っ先にGPSでマロ号を中心に山容を入念に点検すると、止め現場は、車を止めた広場から上の道まで続いている一本の大峰筋の一番目の山頂辺りにあり、マロ号までの距離は五〇〇メートルくらいである。

「よしよし、この距離で、この峠上の猟場なら、勝手知ったるわが家の庭のようなものだ。どんなに逃げ上手な猪でも必ず仕留める自信がある。マロ！　待っていろよ」と気合を入れて、雪中の厳しい大峰筋を上り始めた。

この猟場は何十年も狩り続けている大好きな猟場であるが、険しい上に広大なので、いつもは二人で狩ることが多い。二人なら一台の車はこの広場に止めておき、もう一台で上の道まで上り、ちょうどそこからこの大峰筋に乗って狩り下るのが一番効率的で楽なやり方である。だが、今日は飛び出した猪に的を絞って一人で挑戦している最中なので、そんなわがままを言える状況ではない。

どんなに厳しい猟場であっても、ここはマロ号の止め現場にがむしゃらに寄り付くだけである。流れ出る汗をタオルで拭いながら、古い山道跡の倒木に腰掛けてボトルの水を飲んでいると、右上の岩場から鹿が三頭飛び出して来て、目の前に広がる大峰の急斜面を横切った。距離にして約九〇メートル。山道跡に乗って左下に向かって悠然と走っている。

こんな時のためにブローニング06を三・五倍（ツァイス）にしているのだが、鹿では仕方がない。「よし！」と小声で身構えて素早くスコープに入れて狙ってみるが、はい、そこまでで、撃つ気な



大峰筋はこのようになだらかで歩きやすい。しかし、両側は想像を超える厳しい岩場と崖続きである。左の黒木下がマロ号の第1回目の猪止め現場である

どさらさらない。猪犬猟ではいかなるチャンスでも鹿を撃ってはならないからだ。

主人が鹿を撃てば当然、猪犬は鹿犬となる。関東ではどの県の猟場も今は鹿が多い。その鹿の中から猪を選り分けて狩り出す犬たちでないと猪はなかなか獲れないのである。

最近、山梨の猟場では猪がめっきり少なくなり、犬たちが猪犬になりきっていないと鹿を追ってしまい、せっかくの一日が台なしになる。

今日がそのよい例で、雪中に残った猪跡に乗せて確実に猪を追い出したのだから、この猪を犬たちにどこまでも追わせ、止め切らせた上で勝負をかけるのが一番良い戦い方である。つまり、猪犬を極致まで鍛錬し進化させて、一流猪犬に仕上げた上で上手に実戦で使いこなすことである。

そして、実戦では良い猪跡を見極めて確実に猪にたどり着かせることが大切である。犬たちが見つけた猪なのだから、その場で止め切れずに逃がしたとしても決して諦めず、どこまでも犬たちに追わせて止め切らせ、何度でも勝負をかけて撃ち獲ることである。

どんなに優れた素晴らしい猪犬であっても、猪が付近にいなければ当然、その近くに潜む鹿や熊、狸まで、何でも狩り立てるのも猟犬の立派な本能なのだから仕方がない。肝心なのはこんな時の猟人の心構えである。慌てず騒がず、堂々と善処（撃たずに待つこと）することである。

これからの猪猟やサバイバル戦略とは、あくまでも猪犬を極致まで鍛え上げ、猟場の現状と自分の猟法に合わせて、一人だけでも上手に使いこなすことなのである。

雪中の猪猟

今日の一戦を「大一番」と題して、突撃ラッパを撃ち鳴らした時点で、どんな状況であろうと猪に逃げられたのだから終わった戦いである。しかし、ここで本当に実戦で押し出して理解してほしいと思っているのは、負け戦から立て直したその先の戦略である。つまり、大逆転勝利なのである。

一般的な単独猪犬猟の概念からいえば、寝屋止めした猪に寄り付いて、その場で仕留めるのが原則である。

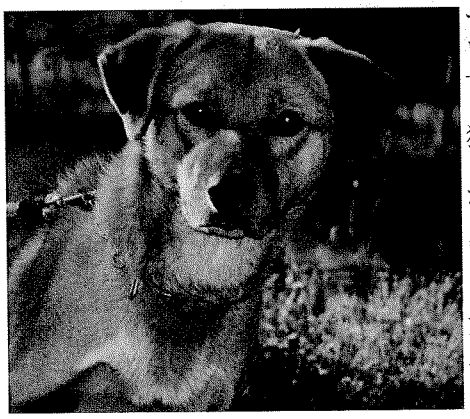
今回、その単独猪犬猟の守備範囲を見事に打ち破られた。猪に逃げられた現実をどう考えて次の一手を繰り出すか。そして、この至難の一戦を最後まで諦めずにどう戦って勝利に結びつけるか。さらに、犬たちとともに戦って完勝し、その喜びと成果をどう未来に繋げていくかなどが、まさにサバイバル戦略であり、これからの猪猟の重要な点となる。

ところで、ここまでの単独猪犬猟はすべてが俺流で、マロ号たちの一流芸があればこその押し出しである。一刻を争う大事な猪止め現場でありながらも、こんなにのんきな戦いができるのもマロ号を信じているからである。

何度となく極限の激戦を潜り抜

けてきたので、マロ号の猪止め芸を知り尽くしている。この鳴き声は何を意味するか、どんな状況にあるかなど、そのすべてが手に取るように分かる極限の中での単独猟なのである。

それでも「マロ、猪に接近するな。一頭だからいつものように離れて戦うのだ」と案じながらも、その一方で、「こうなったらもう大丈夫だ」という思いもある。マロは一時間でも二時間でも猪を逃さないだろう。私さえ頑張ってマロ号に付いて戦い続けていれば、マロ号も猪をがっちり止め切って、「そら、ジジ、撃ってみろ！」と最高のチャンスを作ってくれるはずだ。



マロは私の言葉も簡単なことは分かる。普段はおとなしいが、猪と戦う時の根性は凄いものがある

三頭の鹿を見送ってしばらく待つが、マロ号は追って来ない。そんなことは当たり前だと思うかもしれないが、猪を追って行った犬が途中から鹿に乗り換わることは珍しいことではない。

昨猟期もちょうどこの辺りまで峠から攻め登って来た時のことである。鹿三頭が飛び出した所で、犬たちが追い出し、止めていた大猪六頭が私を避けるように右側の見えない凹地をブイ号一頭に凄い勢いで追い落とされ、何と松土さんが待っていた峠の広場の移動タツに見事に嵌ったのである。

大猪六頭が車を止めてある広場に突然、飛び出して来たものだから、さすがの松土さんも驚いたらしく、二発撃ちかけるも逃げられてしまった。今でも峠に来るたびにそのことを悔しがっている。

最近めっきり猪が少なくなり、出会うことさえ珍しくなったこの猟場であるが、厳しい上に広大なので猟期終盤ともなると山中の生き残った猪が多くたむろして種族の繁栄を図っている。

今日上っている大峰筋は、右側に小屋の沢の険しい大谷が奥まであり、左側も岩場と断崖の厳しい大谷がある。だが、猟人が上り下りするためには、この大峰筋以外に道はない。大物にとっても全く同じで、犬たちに急追された猪や鹿もこの大峰筋は良いバイパスとなっているようで、いつも飛び下りて来る場所である。

今、猪は頂点付近におり、マロ号の芸に嵌ってきっちりと止まってはいるが、いつこのバイパスに飛び下りて来るかもしれない。そういう緊急時でありながらも倒木に腰掛けて待っていたのである。

激戦時に大事になってくるのが、長い年月の体験に裏打ちされた思考力での咄嗟の状況判断である。「あと一歩早ければ……」「反対にあそこでもう少し待てばよかった」など、すべては体験が教えてくれる猪獲りの極意である。

「さあ、行くぞ！」とユンケルをグイと飲み干して雪中の急斜面を上る。再度GPSでマロ号の位置を確認すると、右に曲がりながら上っている大峰筋を横切って越えた左の大谷にあった。三五〇メートルになっているが、「？」印が示されているので正確な距離ではないようだ。

急坂を上ってなだらかな大峰筋にたどり着くには三十分は掛かるだろうが、慌てることはない。雪中の持久戦になれば、いざという時のための体力を温存しながらマイペースで上り、追っかけ寄り付く以外ない。

それにしてもこの猪は凄い。マロ号の見事な追跡にもかかわらず、小峰三本を越えてこんなに遠くまで逃げて、この大峰まで上り詰め、越えてしまうとは何という強さだ。あの時点で一発撃ち込んだのだから、しばらくは止まらないと予想していたが、まさかこんな遠くまで突っ走って来るとは思わなかった。

基本的に雪中での猪は極めて遅く弱いので、雪上で朝方に猪跡を見つければしめたものであり、必ずすぐ近くに寝ている。

何度も説明してきたとおり、猪

が近くに寝ているのだから、静かに鳴き止め系（一、二頭）とともにゆっくりゆっくりと山肌を見極めながら、慎重に雪中の猪跡を追って行くことである。通常、三十分くらいで猪の寝屋までたどり着き、そこで簡単に寝屋止め撃ちができる。

しかし、このチャンスに失敗して猪に早立ちされて逃げられたとしても、大事なことは犬たちを呼び戻して、その場で我慢して三、四十分じっと待つことなのである。そうすれば、猪は犬たちに絡まれたり一発も撃ちかけられていないので、小峰を一つか二つ越えた辺りの物陰に潜んでいるものである。

逃げ出した猪は雪をかき分けながら突進して来るが、体が重くなっているので極めて遅くなり、鳴き止め犬でもすぐ猪に追い付き、簡単に止め切る。思いどおりのリターンマッチが堂々とできる。

特に犬芸が未熟な時や持ち犬がない場合でも、雪中の猪猟はおもしろくて獲りやすい。実戦で絶対に忘れてはならないことが、追って行った先にいる猪への寄り付きと撃ち込みである。

雪中の猪はよく見えて撃ちやすいが、同様に猪からも猟人の接近はよく見えることになる。当然、あと少しのところで逃げられる結果になるが、この時に肝心なのがその場での対応であり、すぐ猪を追わずに我慢して腰を掛けて持つことである。

十分に待った上でゆっくり静かに追って行けば、猪は一峰を越えた先で必ず止まっている。この猪を注意して上手に撃ち獲るのがポイントとなる。

猪猟技術でも猪犬の仕上げでも、そのすべては実戦をもって学び、体験として掴み取るものである。誰もがやっている猪猟に絶えず問題意識を持ち、自己流に改善するために繰り返し繰り返し実戦し吟味することで、誰の真似でもない全く独自の猪猟道を完成したいと思っている。

今にして思えば、自分だけの力でどんな猪でも撃ち獲れる猪猟を実戦したい一念で、自己流で専用の猪犬まで完成してしまったが、この目的はあくまでも独自（俺流）の猪猟を堂々と押し進め完遂することにあった。

本来なら目的は達成し、十分すぎる成果になったのだから満足して猪猟を楽しめばよいが、せっかく苦心して完成させた俺流猪猟や田宮系猪犬なので、さらに鍛え上げて極致の猪猟道と一流猪犬群団に完成させて未来に繋げたいと思っている。

しかし、ここからの壮大な目標は並の努力や挑戦で容易にできることではない。人様が納得して誰もがやってみたいとか、ぜひともそんな犬たちを使ってみたいと思えるような極致の猪猟を貫徹しているのが、まさに今日の大一番である。

私はこの一戦に全力を傾注し、やっと雪中の大峰筋の急斜面を登り切り、馬の背状になっている大峰の台地までたどり着いた。峰筋は高いので快晴でも風があって寒い。吹き溜まりの雪中に残る猪とマロ号の足跡を丹念に確認しながら、なだらかな大峰筋を五〇〇㍍くらい追いかける途中で、この猪が常識破りの恐ろしい化け物であることを思い知らされた。

これは尋常ではない。雪上に残る猪の足跡は大きく一〇〇㌔くらいはある。それなのに何とマロ号の足跡より少し深くぬかっている程度なので、おっかけと雪中の餌不足のためらしいが、七、八〇㌔くらいに痩せたガリになっている。この時期特有の減量によって逃げ足の早い強力な山の主的な存在となったガリが相手だ。こうなると簡単ではない。

さらに足跡を追って三〇〇㍍くらい進み、大峰筋の一番目の頂点を越えた。すると突然、マロ号の鳴き声がポケットの無線機から聞こえてきた。GPSで確認すると、大峰から左に下りている小峰の中間辺りである。

流れる汗をタオルで拭い水を飲んで、「よし待っていろよ、マロ！」と、ブローニング06を三・五倍にしてしっかりと左腕で抱え込み、右手で木やつるを掴みながら慎重に寄り付き始めた。（つづく）